

カトリック町田教会  
町田市中町 3-2-1  
電話 042-722-4504  
FAX 042-722-4512

いかにずちの子

<http://www.machida-catholic.jp/>



そこでマリアは言った。「わたしの魂は主を崇め、わたしの霊は、救い主である神に、喜び踊ります。主が、身分の低いはしのために、目を留めてくださったからです。そうです、今から後、いつの時代の人々も、わたしを幸いな者と呼ぶでしよう。…」

ルカ1. 46-48

### 周りが見えない時代

主任司祭 林 正人

先頃、電車内での痴漢行為の数々が大きなニュースになりました。その中には、不幸なことですが、逃げ出した人が線路内に立ち入り、死亡した事例もありました。ただ、発生したすべてのケースが、痴漢という「犯罪行為」だったかと言えば、必ずしもそうではなかったようで、テレビで取り上げられていた一つのケースは、荷物がぶつかった、ぶつからないの口論が、それもその原因だったとか。それ

で痴漢をした犯罪者にされてしまつては堪つたものではないでしょうが、それでも、敢て言わせていただくならば、まアあれだけの満員電車の中でも、皆一様にスマホの画面にだけ一点集中していれば、無意識に、側にいる人に不快な思いをさせていても判らないだろうと思うのです。周りを見るのがない。いわんや、立っているお年寄りに目を留めるなぞ、望むべくもありません。

そう言えば、昔、短期間イタリアに滞在していた時、一つだけ（失礼！）イタリア人男性に尊敬の念を抱いたことがあります。例えば、女性が重い荷物を持って階段を上ろうとしていると、彼の国の「お世話」は「お手伝い」しましょう」と言つて、荷物を持つてあげるのです。（どうせ若い娘に対してだけだろう。あわよくばオトモダチになれりとも考えているんじゃないか）と思うと、然にあらざるが、それがあちやまであつても、同様に、荷物を持つてあげる。これには感服しました。それが「イタリア人気質」と言えばその通りなのでしょうが、これはやはり、周りにいる人が「見えている」ということではないでしょうか。常に、「自分にできることはなにか。何か、人の役に立つことはできないか」を、胸の内に秘めている…なんていうのは買ひ被りですかね。

19（31）に出てくる金持ちのように、自分のすぐ傍にいる苦しむ人の気持ちに無感覚になつてしまつてしまう。『○○ファースト！』と絶叫する何処かの誰かさんの話は、決して他人ごとではないのです。自分の楽しみ、幸福を探索

### 平和のための祈り（平和旬間2017）

運営委員会議長 一 村 弘 幸

する、それ自体は決して悪いことではありません。しかし、その自分のすぐ傍に、助けを必要としている人がいる、必ずいる、ということだけは、常に心に留めていなければならぬ。自戒を込めて思う次第です。

主の平和  
今年も「平和旬間」の季節がやってきました。皆さんご存知のとおり、この平和旬間は、1981年にヨハネ・パウロ二世教皇が来日した折に、広島市にある広島平和記念公園でのスピーチで、「戦争は人間の仕業です。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です」と訴えられ、この教皇のスピーチを受けて日本の司教団が「平和旬間」と定めたのが始まりです。具体的には、広島に原子爆弾が投下された8月6日から8月9日の長崎の原子爆弾投下をはさんで、第二次世界大戦での敗戦に至る8月15日までの10日間を「平和のために祈りし、平和について学び、行動する」というものです。

今年も、メインテーマが「平和を実現する人々は幸い」、サブテーマが「子どもと貧困」となっております。

東京教区多摩地区の担当として多摩南宣教協力体（町田教会と成城教会）が主幹することになり、実施（会場）担当は町田教会が担うことになりました。すでに皆様にはご案内させていただいておりますが、8月5日（土）16時から岡田武夫東京大司教による講演会（『いのちのまなざし（増補新版）』を讀んで）、18時30分から「平和を願うミサ」を共に聖堂で行います。また、町田教会独自開催として、翌6日（日）に『私と広島』・『長崎』そして平和に向けて『町田教会信徒による平和についての講演会』を開催、13日（日）には「教皇フランシスコの素顔（DVD）」を上映いたします。以上のとおり町田教会の平和旬間は3日間開催となります。詳細は、ナルテックス（玄関ホール）に東京教区の「平和旬間2017パンフレット」

などを掲示しておりますのでご覧ください。多くの皆様のご参加をお願いいたします。主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、町田教会と皆さんと共にありますように。

**森司教様の講話まだら聞き**

余生風 佐藤 正明

去る六月二十二日(木)、当町田教会では活動グループ・ウエルカムテーブルの主催で、森一弘司教様ご指導の一日黙想会がありました。私はその感想文を頼まりましたが、何せ耳の遠い老人の、まだらボケならぬ「まだら聞き」。聞き逃し聞き違えも多々あることを予めご承知おください。

講話のテーマは「教会理解と神理解―信仰生活を深めるために―」で、午前は「教会理解」についてでした。教会とはギリシャ語のエクレスシアの訳語ですが、森司教様は私達の既成理解が、教会という字が示すように教え中心になっていないかと問いかけ、訳語の経緯をあれこれ話された後、教会とは本来どんなものかを、コリントの信徒への手紙一章二節にある「イエス・キリストの名を呼び求める全ての人の集まり」という表現で説明してくださいました。

名を呼び求める人々とはどんな人々なのか？ 旧約では神は善人を祝福し、悪人を呪うと考えられていましたが、イエス様は逆で、罪人や売春婦まで喜んで受け入れられました。だから、そういう人々が主の周りに集まったのです。「主の足を髪で拭いた女性の涙も悔いよりは感謝の嬉し涙だったでしょう。彼らは主の追っかけでした」という司教様の指摘は面白かったと同時に、自分が善人側にいると見がちな私を、ハッとさせました。

「教会とはキリストの周りに集ったそういう人々の集合体でした。そして、その中から語り部が出て、やがてそこから新約聖書ができたのです」このような原点からの講話は、教会が本来どうあるべきかを示唆して実に有益でした。

午後の講話は「神理解」でした。これは紙面の都合で割愛しますが、各講話の後には約一時間の省察時間が設けられていて、私達は各自信仰を深める黙想ができました。

閉会後ふと思いました。「講話を全部聞き取れても実践が皆無なら何にもならない。だが、たとえ半分しか聞き取れないとしても、そのいくらかを実践に活かすなら、皆無よりはまし。まだら聞きでも無駄にはならないんだ」と。

**森一弘司教による黙想会(ウエルカムテーブル)をルポ(池永)**

サムリアの女とイエスの出会い  
ヨハネ4:25-26



「教会の意味」  
教えの会とは  
なっているが  
原語の「エクレスシア」に  
教えという意味はない!

森一弘司教  
真生会館理事長

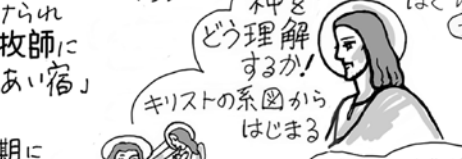
エクレスシア=いたるところでイエスの名を呼び求めて  
主と出合って人生を変えられキリストの人柄に  
惹かれて集まった人たち=教会



教えを中心としたものではなく新約聖書に  
定義はない。たまたまパウロが「コリントへの  
第1の手紙」の冒頭に表現した。



幕末に漂流した漁師がカナダで助けられ  
鎖国を日本に帰れずマカオでドイツ人牧師に  
世話された所→「エクレスシア」を「よりよい宿」  
(人がよびこき休む)と訳す。  
その後、ボン先生が「集会所」、明治中期に  
牧師が「教会」と訳した。



「罪深い女の赦し」  
どこにも安らぎがなかったときに自分をさがめず、  
ぬぎらい、ゆかつかけるイエスに緊張の糸が  
ほぐれて泣いた!  
うれし涙、悔い改めの涙とちがう!



神との関係  
神の心そのものに  
自分の人生を  
ゆだねる  
自分のありのままを  
みつめること  
大事  
心を修復  
ゆがみを  
やわらげる  
みまねの  
まにに!



一人一人の人生が生きてよかった  
と感じるためにつくす神(新約聖書  
に出てくる系図(罪人)はその裏付け。  
神は主であるのではなく使える神(イエスが示した)

**教会の本質**



限界を補ってもらおう  
祈り  
キリストは  
罪の中にとびこんで  
無条件で包み込む

この黙想会に参加できてよかつたと感謝しています。

### 折り鶴をダージリンへ

ESA友の会in町田

水野 貴久子

五月に大久保様ご夫妻らとESAアジア教育支援の会の活動地域の一つ、ダージリンへ行きました。

ダージリンと言えば紅茶を思い浮かべる方も多いでしょう。でも、ここで茶摘みをする女性の日給が二百円にも満たないことをご存知でしょうか。英国植民地時代に避暑地として拓かれたダージリンの丘。その斜面の茶農園で、ネパールやバングラデシユから連れてこられた人達が働いてきました。栄養失調から結核などの病気が蔓延、他の仕事に就く希望も持てずに、アル中、DVや家庭崩壊も多々ありました。

二十五年前、イエズス会の神父が茶農園の中に創る学校の支援をESAに求めて来日されました。早速ダージリンの町から車で一時間半茶畑の中を下ったシングラへ調査に行くと、小屋の前で三十五人の子どもがお遊戯を習っていました。その何倍もの数の子どもが羨ましそうに取り囲んでいました。学校へ行ったことのない親たちは、子どもに教育より水汲みや子守をさせ

たがっていました。

そしてこのたび、学校創立二十五周年のお祝いに呼ばれました。今、セントメリー校では幼児から十学年まで六百人以上が学んでいて、立派な校舎や寄宿舎などが建っています。しかし本当にお祝いすべき教育の成果は建物ではなく、地域の人々や卒業生が貧困を克服し人間らしい暮らしを求める姿勢にみられます。子どもたちが学校で友達と学び、喜々として能力や自信を發揮すると、親たちも目覚めました。子どもたちにはもつと良い生活をさせたいと願い、収入向上を図る自助グループも生まれました。優秀な成績で卒業した生徒はダージリンの町にある学校へ進む道があり、様々な職業に就いています。セントメリー校では教師十七人の中七人は卒業生です。



創立25周年を祝う子ら

生徒や地域の人が教師や神父たちと交わす会話や何気ないしぐさの中に敬愛の情がこもった親密さを見るたびに、この温かい信頼の絆こそ教育の種子であり果実だと教えられました。

町田教会の皆さまには、お祈りを込めた沢山の折り鶴を有難うございました。折り鶴を手にした子ども達が即座に第二日曜日にカレーを食べる支援している皆さまのために祈ってくれました。互いの幸せを祈る精神的分かち合いを大切にしたいと思いました。皆さまのご協力に感謝いたします。

### ヨゼフ会一泊静修会

「歓談のひととき」  
(5月20日～21日)



(この部分は空欄です)

### 特別 奇稿

## 人生、そもそも「なしてもならぬ」もの

西千葉教会司祭 小林 敬三

血液型を自分で選んだ人はいない。生まれるまえから決まっています。しかも一生変えられない。自分の親を自分で選んだ人はいない。気がついたら、この親であった。

能力や才能の場合も同じである。ある人には絵のセンスがあるが、自分にはない。わたしは、スポーツはいろいろ好きだが、いずれも決して上手ではない。「なせばなる」という言葉があるが、なしてもならぬのが人生であって、これは厳然たる事実である。その意味で、人生は決して平等ではない。

すみれの種が百合のように咲こうとするから無理があつて見苦しい。

わたしたちはとかく、「もう少しこうであつたら」などと、変えられないことを数

えあげて嘆きがちである。しかし、これほどむなしことはない。

信仰とは、自分の貧しさに気づいたとき、その事実を悲しむのではなく、むしろ素直に受け入れることから始まるのである。神学者ニーバーの祈りを日々の自分の祈りとしたい。

「主よ、わたしの力で変え得ることなら、それを変える勇気を与えてください。しかし、わたしの力で変え得ないことから、それを受け入れる素直な心をお与えください。」

そして、それが変え得ることか、変え得ないことかを見分ける賢明さをお与えください。

## 平和旬間特集

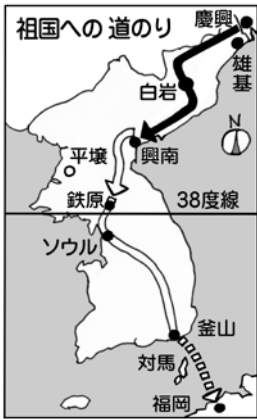
## 孤児たちと死線を越えて(上)

中村 登美枝

暑い夏、打ち上げ花火の音が兵士たちの集団自決の爆発音に重なって、私は今も花火を見る事ができない。寒い冬が来て真っ白い雪を眺めると、筵しじまに包まれ埋葬された両親を思い出し、涙が止まらない。異国の地に葬られた両家の両親と義弟は安らかに眠ることができたのかと、ミサイル発射の報に接する度に悲しくなる。私も91歳になった。

1945年8月8日夜半、ソ満国境の町慶興けいこうの郵便局に勤務する私19歳は、対岸の関東軍陣地が燃えているのに気づき、灯火管制の暗い道を走って局に飛び込んだ。無線室から聞こえる声「ただいまソ連軍と交戦中！ 石丸巡查戦死！」。思わず私は泣いた。優しい石丸巡查はこの夏に赤ちゃんが生まれるというのに！

夜明けとともに砲弾は町を全滅させた。自宅にとつて返した私は、先祖の過去帳と彼



の写真を懐中ふとろに収め、溝の中を這いながら脱出。砲弾に吹き飛ばされて脚に傷を負い、血を流しながら泥人形ねりなまのようになって西峰台せいほうだいへと向かった。8月10日、上三峰かみさんぼうから私を探しにきた父と再会。「よく生きていたなあ」と涙ながらに抱きしめてくれる父の伸びた顎ひげが痛く、娘を探して歩き続けてきた父の優しさに泣いた。先祖の過去帳を渡すと、「偉いよ、登美枝は」とほめてくれたが、わが家が砲撃で消滅したことはついに父に話せなかった。その夜は、星を眺め、父のいびきを頼もしく感じながらの野宿になった。

8月11日、母と弟11歳と再会。私の脚の傷を手当てしてくる母は夏の浴衣姿。いつも着物姿の母の、汗がにじむ衿元えりもとが崩れているのが悲しい。

8月12日、仕事で上三峰かみさんぼうに留まる父を残して出発。延社えんしゃで父を待ち、再び一家4人で無蓋車に乗って南下。白岩はくがん駅に着くとそこが終点と告げられ、日本の敗戦も知らされた。

武装解除した兵士から手榴弾を渡された。その夜、無蓋車に干物のように横になっていた兵士たちが列車もろとも集団自決した。凄まじい爆発音を聞き、飛散する肉片を浴びた父は、無駄死にはするなと私の手から手榴弾を取りあ

げた。露助ろすけ(粗暴なソ連兵の蔑称)による暴行を恐れた父は、河原でいきなり私の長い髪を切り落とした。鏡のないのが幸いだった。丸坊主の自分の頭を撫でて涙がこぼれた。

翌朝、私は彼の写真を二つにちぎり、体の部分は自分の黒髪と共に土の中に埋め、顔の部分は口に入れて飲み込んだ。彼が私の体の中にいると思うと心強い。

炎天下、線路沿いに歩き続けた。露助の略奪と婦女子への暴行。すべてを失い、身一つで興南こうなんの寺に収容されたが、そこもまた安全ではなかった。露助にピストルを突きつけられた時、彼の最後の言葉を思い出した。「生きて内地に帰れよ」。内地に戻るまで、私は自分を守る決心ができた。

厳寒の12月2日、母が亡くなった。46歳。浴衣姿の母に父は自分の上衣をかけてあげた。その父も「俊雄を連れて内地に帰れよ」と言い残して、22日に逝った。私と弟は栄養失調の上に発疹チフスにかかり、高熱のために父の埋葬に立ち会うこともできなかった。ようやく症状が収まった頃、同じ境遇の子供たちの面倒を見てくれないかという話を持ち込まれた。【以下次号】

犠牲献金報告は次号に掲載します。ご了承ください。

## 信者動静

2017年5月～7月

(個人情報のため、紙媒体のみの掲載とします)